

駒田信二 編

KOMADA SHINJI



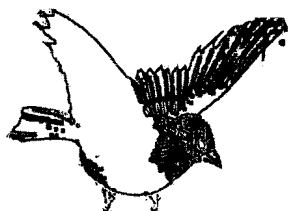
老年文学傑作選



C H I K U M A L I B R A R Y

駒田信二 編

老年文学傑作選



編者 駒田信二 こまだしんじ

1914年三重県生まれ。東京帝国大学文学部支那文学科卒。

中国文学者、小説家、文芸評論家。

「脱出」「島」等の小説、「水滸伝」の翻訳はじめ中国古典の研究、小説教室の講師から、故事・逸話・ジョークの蒐集に至るまで、その活動は多彩。1979年、菊池寛賞を受賞。

主な著書に『対の思想』（勁草書房）、『水滸伝』（講談社文庫）、『私の小説教室』（毎日新聞社）、『漢詩名句はなしの話』（文春文庫）など多数がある。

老年文学傑作選

1990年3月30日発行

久村刊 37

編者／駒田信二

発行者／関根栄郷

発行所／株式会社 筑摩書房

東京都台東区蔵前2-6-4 郵便番号111

電話 東京5687-2680(営業) 5687-2670(編集) 振替東京6-4123

印刷／厚徳社 製本／積信堂 カバー・表紙印刷／京美印刷

ブックデザイン／渡辺千尋 + Kintaro-gumi

© KOMADA SHINJI 1990 Printed in Japan

ISBN4-480-05137-6

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが小社読者係宛に御送付下さい。

送料小社負担にてお取替致します。

老年文学傑作選
目次



晚菊

林芙美子

1

去年今年

木山捷平

23

おばあさんが死んだ

沢木耕太郎

45

蜂と老人

尾崎一雄

91

虚懐

藤枝静男

109

風

多田尋子

141

夕虹

八木義徳

179

そうかもしれない

耕治人

203

横顔

野口富士男

237

※

解説にかえて

老年の充実

駒田信一

259

作家について

269

作品について

272

晩菊

林芙美子



夕方、五時頃うかがいますと云う電話であつたので、きんは、一年ぶりにねえ、まア、そんなものですかと云つた心持ちで、電話を離れて時計を見ると、まだ五時には二時間ばかり間がある。まずその間に、何よりも風呂へ行つておかなければならないと、女中に早目な、夕食の用意をさせておいて、きんは急いで風呂へ行つた。別れたあの時よりも若やいでいなければならない。けつして自分の老いを感じさせては敗北だと、きんはゆつくりと湯にはいり、帰つて来るなり、冷蔵庫の水を出して、こまかくくだったのを、二重になつたガーゼに包んで、鏡の前で十分ばかりもまんべんなく氷で顔をマッサアジした。皮膚の感覚がなくなるほど、顔が赭くしびれて来た。五十六歳と云う女の年齢が胸の

中で牙をむいているけれども、きんは女の年なんか、長年の修業でどうにでもごまかしてみせると云ったきびしきで、取っておきのハクライのクリームで冷い顔を拭いた。鏡の中には死人のように蒼ずんだ女の老けた顔が大きく眼をみはっている。化粧の途中でふっと自分の顔に厭気がさして来たが、昔はエハガキにもなったあでやかな美しい自分の姿が臉に浮び、きんは膝をまくって、太股の肌をみつめた。むつくりと昔のように盛りあがった肥りかたではなく、細い静脈の毛管が浮き立っている。只、そう痩せてもいないと云うことが心やすめにはなる。ぴっちり太股が合っている。風呂では、きんは、きまって、きちんと坐った太股の窪みへ湯をそそぎこんでみるのであった。湯は、太股の溝へじつと溜っている。吻つとしたやすらぎがきんの老いを慰めてくれた。まだ、男は出来る。それだけが人生の力頼みのような気がした。きんは、股を開いて、そつと、内股の肌を人ごとのようになでてみる。すべすべとして油になじんだ鹿皮のような柔らかさがある。西鶴の「諸国を見るは伊勢物語」のなかに、伊勢の見物のなかに、三味を弾くおすぎ、たま、と云うふたりの美しい女がいて、三味を弾き鳴らす前に、真紅の網を張りめぐらせて、その網の目から二人の女の貌をねらっては銭を投げる遊びがあつたと云うのを、きんは思い出して、紅の網を張つたと云う、その錦絵のような美しさが、いまの自分にはもう遠い過去の事になり果てたような気がしてならなかった。若い頃は骨身に沁みて金慾に目が暮れていたものだけれども、年を取るにつれて、しかも、ひどい戦争の波をくぐり抜けてみると、きんは、男のない生活は空虚で頼りない気がしてならない。年齢によって、自分の美しさも少しづつは変化して来ていたし、その年々で自分の美しさの風格が違って来ていた。きんは年を

取るにしたがつて派手なものを身につける愚はしなかった。五十を過ぎた分別のある女が、薄い胸に首飾りをしてみたり、湯もじにでもいいような赤い格子縞のスカートをはいて、白サティンの大だぶだぶのブラウスを着て、つば広の帽子で額の皺を隠すような妙な小細工はきんはきらいだった。それかと云つて、着物の襟裏から紅色をのぞかせるような女郎のようないやらしい好みもきらいであつた。

きんは、洋服は此時代になるまで一度も着た事はない。すつきりとした真白い縮緬の襟に、藍大島の紺の袷、帯は薄いクリーム色の白筋博多。水色の帯揚げは絶対に胸元にみせない事。たつぷりとした胸のふくらみをつくり、腰は細く、地腹は伊達巻で締めるだけ締めて、お尻にはうつつりと真綿をしのばせた腰蒲団をあてて西洋の女の粹な着つけを自分で考え出していた。髪の毛は、昔から茶色だったので、色の白い顔には、その髪の毛が五十を過ぎた女の髪とも思われなかった。大柄なので、裾みじかに着物を着るせいとか、裾もとがきりつとして、さつぱりしていた。男に逢う前は、かならずこうした玄人っぽい地味なつくりかたをして、鏡の前で、冷酒を五勺ほどきゅうとおおる。そのあとは歯みがきで歯を磨き、酒臭い息を殺しておく事もぬかりはない。ほんの少量の酒は、どんな化粧品をつかったよりもきんの肉体には効果があつた。薄つすりと酔いが発しると、眼もとが紅く染まり、大きい眼がうるんで来る。蒼っぽい化粧をして、リスリンでといたクリームでおさえた顔の艶が、息を吹きかえたようにさえぎえて来る。紅だけは上等のダークを濃く塗っておく。紅いものと云えば唇だけである。きんは、爪を染めると云うことも生涯した事がない。老年になつてからの手はなおさら、そうした化粧はものほしげで貧弱でおかしいのである。乳液でまんべんなく手の甲を叩いておく

だけで、爪は癩性^{かんしょう}なほど短く剪^きつて羅紗^{らしゃ}の裂^{きれ}で磨いて置く。長襦袢の袖口にかいま見える色彩は、すべて淡い色あいを好み、水色と桃色のぼかしたたげななどを身につけていた。香水は甘ったるい匂いを、肩とぼつてりした二の腕にこすりつけておく。耳朶^{みみたが}なぞへは間違つてもつけるような事はしないのである。きんは女である事を忘れたくないのだ。世間の老婆の薄汚なきになるのなら死んだ方がましなのである。——人の身にあるまじきまでたわゝなる、薔薇^{ばら}と思へどわが心地する。きんは有名な女の歌つたと云うこの歌が好きであつた。男から離れてしまった生活は考えてもぞつとする。板谷の持つて来た、薔薇の薄いピンクの花びらを見ると、その花の豪華さにきんは昔を夢見る。遠い昔の風俗や自分の趣味や快楽が少しずつ変化して来ている事もきんには愉^{たの}しかつた。一人寝の折、きんは真夜中に眼が覚めると、娘時代からの男の数を指でひそかに折り数えてみた。あのひとあのひと、それにあのひと、ああ、あのひともある……でも、あのひとは、あのひとよりも先に逢つていたのかしら……それとも、後だつたかしら……きんは、まるで数え歌のように、男の思い出に心が煙たくむせて来る。思い出す男の別れ方によつて涙の出て来るような人もあつた。きんは一人一人の男に就いては、出逢いの時のみを考えるのが好きであつた。以前読んだ事のある伊勢物語風に、昔男ありけりと云う思い出をいっぱい心に溜^{ため}めているせいか、きんは一人寝の寢床のなかで、うつらうつらと昔の男の事を考えるのは愉しみであつた。——田部からの電話はきんにとっては思いがけなかつたし、上等の葡萄酒にでもお眼にかかつたような気がした。田部は、思い出に吊^つられて来るだけだ。昔のなごりが少しは残っているであろうかと云つた感傷で、恋の焼跡を吟味しに来るようなものなのだ。草

茫々の瓦礫の跡に立つて、只、ああと溜息だけをつかせてはならないのだ。年齢や環境に聊さかの貧しさもあつてはならないのだ。慎重な深い表情が何よりであり、雰囲気は二人でしみじみと没頭出来るようなただよいでなくてはならない。自分の女は相変らず美しい女だったと云う後味のなごりを忘れさせてはならないのだ。きんはとどこおりなく身仕度が済むと、鏡の前に立つて自分の舞台姿をたしかめる。万事抜かりはないかと……。茶の間へ行くと、もう、夕食の膳が出ている。薄い味噌汁と、塩昆布に麦飯を女中と差し向いで食べると、あとは卵を破つて黄身をぐつと飲んでおく。きんは男が尋ねて来ても、昔から自分の方で食事を出すと云うことはあまりしなかった。こまごまと茶餉台をつくつて、手料理なんですよと並べたてて男に愛らしい女と思われたいなぞとは露ほども考えないのである。家庭的な女と云う事はきんには何の興味もないのだ。結婚をしようなぞと思ひもしない男に、家庭的な女として媚びてゆくいわれはないのだ。こうしたきんに向つて来る男は、きんの為に、いろいろな土産物を持つて来た。きんにとってはそれが当り前なのである。きんは金のない男を相手にするような事はけつしてしなかった。金のない男ほど魅力のないものはない。恋をする男が、ブラッシュもかけない洋服を着たり、肌着の釦のはずれたのぞ平気で着ているような男はふつと厭になつてしまふ。恋をする、その事自体が、きんには一つ一つ芸術品を造り出すような気がした。きんは娘時代に赤坂の万竜に似ていると云われた。人妻になつた万竜を一度見掛けた事があつたが、惚々とするような美しい女であつた。きんはその見事な美しさに唸つてしまつた。女が何時までも美しさを保つと云う事は、金がなくてはどうにもならない事なのだと悟つた。きんが芸者になつたのは、十九の時

であつた。大した芸事も身につけてはいなかつたが、只、美しいと云う事で芸者になり得た。その頃、仏蘭西人で東洋見物に来ていたもうかなりな年齢の紳士の座敷に呼ばれて、きんは紳士から日本のマールグリット・ゴオチエとして愛されるようになり、きん自身も、椿姫気取りでいた事もある。肉体的には案外つまらない人であつたが、きんには何となく忘れがたい人であつた。ミッシェルさんと云つて、もう、仏蘭西の北の何処かで死んでゐるに違ひない年齢である。仏蘭西へ帰つたミッシェルから、オパールとこまかいダイヤを散りばめた腕環を贈つて来たが、それだけは戦争最中にも手放さなかつた。――きんの関係した男達は、みんなそれぞれに偉くなつていつたが、この終戦後は、その男達のおおかたは消息も判らなくなつてしまつた。相沢きんは相当の財産を溜め込んでゐるだろうと云う風評であつたが、きんはかつて待合まちあいをしようとか、料理屋をしようなどとは一度も考えた事がなかつた。持つてゐるものと云えば、焼けなかつた自分の家と、熱海の別荘を一軒持つてゐるきりで、人の云うほどの金はなかつた。別荘は義妹の名前になつてゐたのを、終戦後、折を見て手放してしまつた。全くの無為むゐ徒食とじよくであつたが、女中のきぬは義妹の世話であつたが啞おしの女である。きんは、暮しも案外つましくしてゐた。映画や芝居を見たいと云う氣もなかつたし、きんは何の目的もなくうろろと外出する事はきらいであつた。天日にさらされた時の自分の老いを人目に見られるのは厭であつた。明るい太陽の下では、老年の女のみじめさをようしゃなく見せつけられる。如何なる金のかかつた服飾も天日の前では何の役にもたたない。陽蔭ひかげの花で暮す事に満足であつたし、きんは趣味として小説本を読む事が好きであつた。養女を貰つて老後の愉たのしみを考えてはと云われる事があつても、きんは老

後なぞと云う思いが不快であつたし、今日まで孤独で来た事も、きんには一つの理由があるのだつた。——きんは両親がなかった。秋田の本庄近くの小砂川の生れだと云う事だけが記憶にあつて、五ツ位の時に東京に貰われて、相沢の姓を名乗り、相沢家の娘として育つた。相沢久次郎と云うのが養父であつたが、土木事業で大連に渡つて行き、きんが小学校の頃から、この養父は大連へ行きっぱなしで消息はないのである。養母のりつは仲々の理財家で、株をやつたり借家を建てたりして、その頃は牛込の菓店に住んでいたが、菓店の相沢と云えば、牛込でも相当の金持ちとして見られていた。その頃神楽坂に辰井と云う古い足袋屋があつて、そこに、町子と云う美しい娘がいた。この足袋屋は人形町のみようが屋と同じように歴史のある家で、辰井の足袋と云えば、山の手の邸町でも相当の信用があつたものである。紺の暖簾を張つた広い店先きにミシンを置いて、桃割に結つた町子の黒縹子の襟をかけてミシンを踏んでいるところは、早稲田の学生達にも評判だつたとみえて、学生達が足袋をあつらえに来ては、チップを置いて行くものもあると云う風評だつたが、この町子より五ツ六ツも若いきんも、町内では美しい少女として評判だつた。神楽坂には二人の小町娘として人々に云いふらされていた。——きんが十九の頃、相沢の家も、合百の鳥越と云う男が出入りするようになってから、家が何となくかたむき始め、養母のりつは酒乱のような癖がついて、長い事暗い生活が続いていたが、きんはふつとした冗談から鳥越に犯されてしまった。きんはその頃、やぶれかぶれな気持ちで家を飛び出して、赤坂の鈴木と云う家から芸者になつて出た。辰井の町子は、丁度その頃、始めて出来た飛行機にふり袖姿で乗せて貰つて洲崎の原に墜落したと云う事が新聞種になり、相当評判をつくつた。き

んは、欣也と云う名前で芸者に出たが、すぐ、講談雑誌なんか写真が載ったりして、しまいには、その頃流行のエハガキになったりしたものである。

いまから思えば、こうした事も、みんな遠い過去のことになってしまったけれども、きんは自分が現在五十歳を過ぎた女だとはどうしても合点^{がてん}がゆかなかった。長く生きて来たものだと思う時もあったが、また短い青春だったと思う時もある。養母が亡くなったあと、いくらもない家財は、きんの貰われて来たあとに生れたすみ子と云う義妹にあつさり継がれてしまっていたので、きんは養家に対して何の責任もない軀^{からだ}になっていた。

きんが田部を知ったのは、すみ子夫婦が戸塚に学生相手の玄人^{くろうと}下宿をしている頃で、きんは、三年ばかり続いていた旦那と別れて、すみ子の下宿に一部屋を借りて気楽に暮していた。太平洋戦争が始った頃である。きんはすみ子の茶の間で行きあう学生の田部と知りあい、親子ほども年の違う田部と、何時^{いつ}か人目を忍ぶ仲になっていた。五十歳のきんは、知らない人の目には三十七八位にしか見えない若々しきで、眉の濃いのが匂うようであった。大学を卒業した田部はすぐ陸軍少尉で出征したのだけれども、田部の部隊はしばらく広島に駐在していた。きんは、田部を尋ねて二度ほど広島へ行った。

広島へ着くなり、旅館へ軍服姿の田部が尋ねて来た。革臭い田部の体臭にきんはへきえきしながらも、二晩を田部と広島の旅館で暮した。はるばると遠い地を尋ねて、くたくたに疲れていたきんは、田部の逞^{たくま}しい力にほんろうされて、あの時は死ぬような思いだったと人に告白して云った。二度ほど田部を尋ねて広島に行き、その後田部から幾度電報が来ても、きんは広島へは行かなかった。昭和十

七年に田部はビルマへ行き、終戦の翌年の正月に復員して来た。すぐ上京して来て、田部は沼袋のきんの家を尋ねて来たが、田部はひどく老けこんで、前歯の抜けているのを見たきんは昔の夢も消えて失望してしまつた。田部は広島の子でであつたが、長兄が代議士になつたとかで、兄の世話で自動車会社を起して、東京で一年もたたない間に、見違えるばかり立派な紳士になつてきんの前に現われ、近々に細君を貰うのだと話した。それからまた一年あまり、きんは田部に逢う事もなかつた。——きんは、空襲の激しい頃、捨て値同様の値段で、現在の沼袋の電話つきの家を買ひ、戸塚から沼袋へ疎開していた。戸塚とは眼と鼻の近さでありながら、沼袋のきんの家は残り、戸塚のすみ子の家は焼けた。すみ子達が、きんのところへ逃げて来たけれども、きんは、終戦と同時にすみ子達を追い出してしまつた。尤も追ひ出されたすみ子も、戸塚の焼跡に早々と家を建てたので、かえつていまではきんに感謝している有様でもあつた。今から思えば、終戦直後だつたので、安い金で家を建てる事が出来たのである。

きんも熱海の別荘を売つた。手取り三十万近い金があるのと、その金でばら家を買つては手入れをして三、四倍には売つた。きんは、金にあわてると云う事をしなかつた。金銭と云うものは、あわてさえしなければすくすくと雪だるまのようにふくらんでくれる利徳のあるものだと言ふ事を長年の修業で心得ていた。高利よりは安い利まわりで固い担保を取つて人にも貸した。戦争以来、銀行をあまり信用しなくなつたきんは、なるべく金を外へまわした。農家のように家へ積んで置く愚もしなかつた。その使いにはすみ子の良人の浩義を使つた。幾割かの謝礼を払えば、人は小気味よく働いてくれ

るものだと言ふ事もきんは知っていた。女中との二人住いで、四間ばかりの家うちは、外見には淋しかったのだけれども、きんは少しも淋しくもなかったし、外出ぎらいであつてみれば、二人暮らしを不自由とも思わなかつた。泥棒の要心には犬を飼う事よりも、戸締りを固くすると云う事を信用して、何処の家よりもきんの家は戸締りがよかつた。女中は啞なので、どんな男が尋ねて来ても他人に聞かれる心配はない。その癖きんは、時々、むごたらしい殺され方をしそうな自分の運命を時々空想する時があつた。息を殺してひっそりと静まり返つた家と云うものを不安に思わないでもない。きんは、朝から晩までラジオをかける事を忘れなかつた。きんはそのころ、千葉の松戸で花壇をつくつてゐる男と知りあつてゐた。熱海の別荘を買つた人の弟だとかで、戦争中はハノイで貿易の商社を起してゐただけけれども、終戦後引揚げて来て、兄の資本で松戸で花の栽培を始めた。年はまだ四十歳そこそこであつたが、頭髮がつるりと禿げて、年よりは老けてみえた。板谷清次と云つた。二三度家の事できんを尋ねて来たけれども、板谷は何時の間にかきんの処へ週に一度は尋ねて来るようになってゐた。板谷が来始めてから、きんの家は美しい花々の土産で賑わつた。——今日もカスタニアンと云う黄いろい薔薇がざくりと床の間の花瓶に差されている。銀杏の葉、すこし零れてなつかしき、薔薇の園生の霜じめりかな。黄いろい薔薇は年増ざかりの美しさを思わせた。誰かの歌にある、霜じめりした朝の薔薇の匂いが、つうんときんの胸に思い出を誘う。田部から電話がかかつてみると、板谷よりも、きんは若い田部の方に惹かれてゐる事を悟る。広島では辛かつたけれども、あの頃の田部は軍人であつたし、あの荒々しい若さも今になれば無理もなかつた事だとなつて嬉しい思い出であ

る。激しい思い出ほど、時がたてば何となくなつかしいものだ。——田部が尋ねて来たのは五時を大分過ぎてからであつたが、大きな包みをさげて来た。包みの中から、ウイスキーや、ハムや、チーズなどを出して、長火鉢の前にどつかと坐つた。もう昔の青年らしさはおもかげもない。灰色の格子の背広に、黒っぽいグリンのズボンをはいているのは如何にも此時代の機械屋さんと云つた感じだつた。「相変らず綺麗だな」「そう、有難う、でも、もう駄目ね」「いや、うちの細君より色っぽい」「奥さまお若いンでしよう?」「若くても、田舎者だよ」きんは、田部の銀の煙草ケースから一本煙草を抜いて火をつけて貰つた。女中がウイスキーのグラスと、さっきのハムやチーズを盛りあわせた皿を持つて来た。「いい娘だね……」田部がにやにや笑いながら云つた。「ええ、でも啞なのよ」ほほうと云つた表情で、田部はじいっと女中の姿をみつめていた。柔和な眼もとで、女中は丁寧に田部に頭をさげた。きんは、ふっと、気にもかけなかつた女中の若さが目障りになつた。「御円満なのでしょう?」田部はぷうと煙を吹きながら、ああ僕ンとこかいと云つた顔で、「もう来月子供が生れるンだ」と云つた。へえ、そうなのと、きんはウイスキーの瓶を持つて、田部のグラスにすすめた。田部は美味そうにきゆうとグラスを空けて、自分もきんのグラスにウイスキーをついでやつた。「いい生活だな」「あら、どうして?」「外は嵐がごうごうと吹き荒さんでいるのにさ、君ばかりは何時までたつても変らない……不思議な人だよ。どうせ、君の事だから、いいパトロンがいるんだろうけど、女はいいな」「それ、皮肉ですか?」でも、私、別に、田部さんに、そんな風な事言われる程、貴方に御厄介かけたつて事ないわね?」「憤つたの?」そうじゃないンだよ。そうじゃないンだ。あんたは倅